
真実のトビラ 番外編

usa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真実のトビラ 番外編

【Nコード】

N8001M

【作者名】

usa

【あらすじ】

本編では明かされなかった、園子と志保の秘密の計画が明らかに！『真実のトビラ』を見てからの方が、より分かりやすいと思います。

少し甘めの新蘭です。

ピンポーン…

チャイムの音がする。蘭かな。

まだ寝ぼけた頭で、新一は玄関へと向かう。

「おはよう、新一！」

ドアを開けると、そこには、満面の笑顔の蘭がいた。

「はよ。…あれ、宮野は？」

「今日は何か用事があるから先に行くって」

「へー…」

何だか、いやな予感がする。

気のせいだろうか…。

「さ、はやく支度して。朝ごはん準備しとくから」

「あ、ああ」

蘭に促されて、新一は支度を始める。

何も変わっていないように見えるが、この二人は、昨日、恋人同士になったばかりである。

ただ、昨日の帰りも、二人は赤くなるばかりで、告白したまま、進展はない。

まあ、この奥手なカップルに、告白してからすぐに何かあったら、

驚きなのだが。

「新一ー！早く、時間ないよー！」
リビングから聞こえる蘭の声に、新一は急ぐ。

「あつ、新一ってば、ネクタイ曲がってるよ」
朝食を運ぶ手を止めて、蘭は新一の制服のネクタイを直す。

「えっ？あつ、わ、わりい…」

新一はそう言いながらも、少し赤くなっている。

それを見て、蘭もつられて赤くなる。

「つて、時間！新一、急いで！」

「やっべ！」

二人は慌てて外に飛び出す。

そ・し・て

何だか、胸騒ぎがする…。朝起きてからずっとだ。

新一の隣にいる蘭は、そんな新一の気持ちにも築かず、楽しそうに話している。

そして、その笑顔を見た新一の不安も、少し薄れるのであった。

だが、教室に入ったその瞬間、新一は自分が甘かったことを、つくづく感じたのであった。

ガラッ

教室のドアを開けたその時。

パンっ、パンっ、パーン！

クラッカーのような音がした。

「「え？」」

「もう、皆そろえなくちゃ、ダメじゃない！」

「そ、園子！」

「だって合図が聞こえねーんだもん」

「まったく。最初から失敗じゃない」

「宮野！何やってんだよ、てめえら！」

新一の言葉に、園子は待ってました、と言うようにニンマリとする。

「お二人さん、コレよ、コレ」

園子が指差した方を見る。

「ハア！？」

「ンだよ、コレ！？」

と、二人は声を上げる。

園子が指差した黒板には…。

『おめでとう！新一＆蘭 恋人記念パーティー！』

…と、派手に描かれていた。

「何、コレ、どーいうこと!？」

「おい、園子、宮野!何やってんだよ!」
多少混乱気味の蘭と新一。

「見りゃわかるでしょ?」

「あなた達のために開いてあげたのよ」

「な、何勝手に…」

「つーか、学校でやっていいわけが…」

新一の言葉を遮り、園子は担任を引っ張ってくる。

「ちゃーんと先生の許可は取ってるわよ」

「ちょっと、先生!」

「いいんすか、コレ!？」

「うーん、ホントはいけないんだけど…面白そうだから、許した」
どこまで呑気な先生だろう。いいのだろうか、本当に…。

「ほらほら、主役は座った」

園子に押されて、二人はしぶしぶ椅子に座る。

「んで、何すんだよ、一体…」

「あら、決まってるでしょ?」

「二人の告白の様子について、ぜーんぶ、話してもらうのよ!」
志保と園子はニヤツとする。

「はあっ!？」

「誰がするか!」

「そんなこと言ってもいいのかしら、工藤君」

志保の言葉に、新一は再びいやな予感がした。

「園子。あった？」

志保は蘭のバッグを見ていた園子に声をかける。

「園子、なんで人のバッグを…」

「あーっ、あったあった」

園子は蘭のバッグから、お弁当の包みを取り出す。

「あっ、それ、新一の…！」

「さーあ、新一君。しゃべらないと、この蘭特製のお弁当、ほかの男子にあげちゃうわよー」

園子は、新一の前でお弁当を揺らす。

「クラスの男子諸君、蘭のお弁当、食べたい？」

園子が言うと、男子全員がもちろん、と言った顔でうなずく。

（こいつら、皆グルかよ…）

「さあ。話す？話さない？」

園子が新一に、究極の決断を迫る。

恥ずかしい想いをして、蘭の手作り弁当を守るか。

それとも、弁当を渡し、園子から免れるか。

「ほら、はやくしないと、さっさと渡しちゃうわよー」

今にも弁当を渡しそうな園子を見て、ついに新一は観念した。

「わあったよ！話しゃいいんだろ！」
と、怒鳴る。

「ちょっと！何言ってるのよ！」

と、蘭が言うが、志保に止められてしまった。

「はいはい、皆さん、静粛に！これから新一君と蘭が、昨日の告白の様子について、語ってくれるようです」

その言葉に、クラス全員が拍手。しかも、担任までもが、興味心身に聞いていた。

「（てめえがそそのかしたんだろ、てめえが）」
と、新一は小声で言った。

そして、二人が無理矢理語らせられる羽目になった。

「…と、言うわけで…。もういいだろ…？」
さすがの新一も真っ赤である。

隣の蘭は、笑顔ではいるものの、その手は力が入りすぎて震えていた。

「しょうがないわねえ。これぐらいで勘弁してあげましょうか」
蘭の様子を見た園子と志保も、ヤバいと感じたのか、そう言った。

「それじゃ、終わりにしましょうか？」

「あーっと、その前に！」

再び、園子はニンマリとした。

「お二人さん、最後はやっぱり、あれで締めないとね♪」
「「あれって？」」

「わかんないの？キスよ。キ・ス！」

二人は一瞬、何の事だかわからず、キョトンとした。

やがて、園子の言葉の意味を理解すると、

「な、何言ってるんだよ、誰がするかバーロー？」

「そうよ！何でこんなお大勢の前で…」

「二人きりだったらするの？」

「そういう意味じゃ…」

「ほら、恥を捨てなさいよ、恥を！」

今度は志保が二人を立たせる。

「（新一！こんなところでしたら、許さないからね！）」

蘭に小声で言われたが、新一は迷ってる様子。

「ほらほら、はやくう！」

園子は楽しそうに言う。

「（わりの、蘭！）」

「ちよっ」

蘭が何かを言う前に、二人の唇は完ぺきに重なっていた。

二人が離れると、男子が冷やかし始めた。

だが、蘭は…。

「サイッター！」

と、言ってから、新一の頬を思いっきり、しかもグーで殴った。
そして、どこかへ走って行った。

「いってえ〜」

「おいおい、大丈夫かよ、工藤」

「大丈夫なわけねえだろが」

「それより。新一君、蘭、どっか行っちゃったわよ」

「追いかけたら？」

「もとはテメエらのせいだろが！」

そう言いながらも、新一は教室を飛び出していった。

「おーっ！いいぞ、工藤！」

「行け行けー！」

「おい、蘭！待てっつの！」

新一は蘭を見つけたものの、蘭はずっと走って新一から逃げている。

「蘭、悪かった、って」

「許さないって言ったでしょ！」

「そうだけどさ…」

ようやくと蘭の腕をつかむと、新一は頭を下げる。

「ゴメン、蘭。勝手に、あんなことしちゃって…」

「あんなこと？」

「いや、その、本当に…キス、して…」

しどろもどろに言う新一を見て、蘭は少しだけ、頬を緩める。

「私が怒ってるのは、キスしたことじゃないよ」

「え…？」

「あんなに大勢の前でしたことを怒ってるの！」

「…やっぱ怒ってんじゃない」

「そりゃ、怒るよ。だって、初めての時は…二人っきりの時したい

もん」

そう言う蘭の顔が、少しだけ赤くなった。

「…蘭、ちょっと来いよ!」

「え? な、何?」

新一が連れてきたのは、屋上。

昨日も、ココで二人は告白した。

「ココなら、二人つきりだろ?」

新一はそう言って笑った。

「さっきのはナシってことで。な?」

「う、うん…」

それでもう一度二人は、キスをした。

屋上のドアの隙間から、クラスメイトが見ているとは知らずに…。

この後、教室に戻った二人は、再び冷やかされる羽目になった。

(後書き)

作「いやー、お二人とも、ラブラブですね。
何かこっちも恥ずかしいです」

新「そうかいたのはあんただろ？」

作「えっ？ いいじゃん」

新「良くねえよ！ お前がこう書いたせいで、オレ達がどんな目に会ったか…」

蘭「新一ってば。落ち着きなさいよ」

新「……」

作「おおっ、蘭ちゃんパワーすげえ…」

新「ンだよ、それ…」

園「ねえ、もう少しラブラブにしてもいいんじゃないの？」

志「そうよ。これだけじゃ、何かものたりないし」

新「余計なこと言うなよ、お前ら！」

園「でも、成り行きでもちよっと嬉しかったんじゃないの？ 新一君♪」

新「んっ、んなわけねえだろ！」

作「終わらなそうなので、これにて強制終了にします！
新ちゃん、ドンマイ！」

新「オレをそう呼ぶな！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8001m/>

真実のトビラ 番外編

2011年10月7日07時15分発行